

翻
訳

Charlotte M. Brane 著 『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その23)

堀 啓子

これまで『東海大学紀要 文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要 文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載二十三回目となるこのたびは、第二十八章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続き Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究(C)】「課題番号: 21K00290」による研究成果の一部である。

二十八章

エアリー卿は翌朝、ギヤスパ・ローレンスがアールズコートに現れたのを見て、小声で口汚く罵った。

「今朝はお客様は見えないはずですわね」とベアトリスが半ばいらだつたように言った。「ミスター・ローレンスは今夜の舞踏会のことをお忘れのようですわ。」

しかしミスター・ローレンスはそうしたことは決して忘れていなかった。それは美しい朝で、陽光は明るく鮮やかに降り注ぎ、新鮮で涼し気な西からの風が吹いていた。若いレディーたちがその朝をきつと戸外で過ごすだろうと考えた彼は、同席することへの許しを願いにきた。

アール卿夫人はその申し出を歓迎した。エアリー卿は少し疲れたようなことをつぶやいたが、皆に却下された。

「外を散歩なさって」とレディー・ヘレナは言った。「湖の側までいらっしゃると良いでしょう。私も後でそちらまで参りましょう。」

数時間も外で新鮮な外気に当たったら、今夜の舞踏会をよい状態で迎えられるですよ。」

彼らは連れ立って出かけた。片時もそばを離れないことから、ギヤスパーはベアトリスが好きだとはつきりした。エアリー卿は彼が地球の裏側にでも行ってくれたらと強く願っていた。

彼らは大きな樺の木陰に腰を下ろした。その木を通して降り注ぐ陽光が、深い湖をきらめかせた。小さな本を手にしたギヤスパーはこう尋ねた。

『ウンディーネ』をお読みになったことはありますか、ミス・アール——フーケの『ウンディーネ』のことですが。」

「いいえ」と彼女は答えた。「お恥ずかしいことですが。」

「これは全ての物語の中で最も美しく悲しい話です。」と彼は続けた。「この朝は、この物語にぴったりです。お読みしてもよろしいでしょうか?」

優しい喜びのこめられた同意のつぶやきが返事となった。エアリー卿は、自分には敵わないが、こうしたドイツ風の感傷を披露しようとする輩のことは分かっている、とひとり言を言った。

ギヤスパー・ローレンスは巧みに朗読した。その声ははつきりし

て聴きやすく、この美しい物語の片言隻句ももらすことはなかった。

ベアトリスは夢の中にいるかのように聴いていた。誇り高く輝く表情は和らぎ、美しい瞳は優しく、半ば悲しげになった。ギヤスパーは先へと読み進み——あの美しく愛らしい娘、若くハンサムな騎士と彼の恋愛、あの水の妖精、冷酷な老キューレポルン、そしてウンディーネが住んでいた小屋、その騎士の結婚、そして誇り高く美しいベルタ、などが登場してきた。

湖の波音や鳥の鳴き声はちょうどこの物語の背景音楽のようで、哀感に満ちていた。そうしてギヤスパーは、ベルタの騎士への愛——そして騎士の愛が冷めた時に、彼らがさしかかった川から巨大な手が現れて、ウンディーネの柔らかな指から宝石を引きさらった場面へと語りを進めた。

そしてギヤスパーが、美しく悲しいウンディーネと彼女の不幸な愛情、ベルタの誇り高い勝利、彼女と騎士との結婚、そしてついにあの最も美しいシーン——ウンディーネが湖の中から現れてその愛を告げるあの場面では、彼らの側の湖もすすり泣いてため息をついたように思われた。

「なんて美しいのでしょうか!」長く深い息を吐き、ベアトリスは言った。「こんな話があるなどと知りもしませんでした。本当に天才の作品ですね。私は決してウンディーネを忘れません。」

彼女の視線は、愛らしく上品な妹の顔と金髪の上をさまよった。ライオネル・ダッカーの視線もその後を追った。

「何をお考えなのかわかりますよ」と彼は言った。——「ミス・リリアンはウンディーネそのものです。両手を組んで、悲しげな瞳である騎士とベルタの間に立つ姿や、二つに割れた湖から臃腫たる衣装に身を包んで現れる姿が思い起こされます。」

「美しい創造物ですわ」とベアトリスは優しく言った。「リリアンは理想的なウンディーネです——まさに優しく、綺麗で、誠実で。私はベルタのようだと思いますわ。少なくとも、我が道と自分の意志を重んじるのが好きだと自覚しています。」

「優れた画家に絵を描かせたらよいでしょう。」とエアリー卿が言った。「ウンディーネが綺麗な顔に夢見る表情を浮かべてボートから湖に身を乗り出して、ベルタが高慢で輝くような、そしてこの友を半ば嘲るような表情で例の騎士の側に座っているあの場面をお選びになるべきでしょう。透き通った水にその小さな手を半ば浸し、巨人の指がその両手をつかんでいる場面をご想像ください。この情景を描いた画家は今までいなかったでしょう。」

「騎士はどなたが？」とベアトリスが言った。「リリアンと私は決して一人の騎士を取り合ったりしませんわ。」

「画家が難しさを感じるところがありそうですわ」とリリアンは

言った。「美しく理想のウンディーネにどのように着物を着せられましょう。床に流れる裾と揺れる羽飾りはベルタに似合うでしょう。でもどのようにしたらウンディーネを描画できましょう。」

「この騎士は難しいでしょう。」とライオネルは笑った。

「さあ我々も湖に出ませんか？」とギヤスパーが言った。「私が漕ぎましょう。」

「朗読されている最後の十分ほどは」とベアトリスは応じた。「湖に出たいと思っていました。湖に手を入れて、どんなことが起きるのか見てみたいのですわ。」

ギヤスパーはすぐにボートハウスからボートを湖に引き出してきた。ライオネルは彼のウンディーネの側に首尾よく座を占め、エアリー卿はベアトリスの側に腰かけた。

湖上は、湖の側にいた時よりもっと楽しかった。新鮮できれいな風も助け、ボートはスムーズに動いた。

「あちらのきれいな睡蓮のほうに行ってみてくださいね。とベアトリスは言った。「とても生き生きして陽の光で輝いていますわ。」

そうして湖上にいる間、彼女はあの五月の朝、リリアンが崖に座って遠くの白い帆船をスケッチしていたあの朝に思いを馳せた。何

と昔のことに思えることか！その時の彼女には人生に強く望むものがあつた。だが今では、愛情に彩られた、人生の楽しみみのすべてが手中にあつた。それでもヒュー・ファナーリーの顔が思い出され、彼女はため息を吐いた。忘れられさえすれば！結局のところ、彼女に付きまといつていたのは名ばかりの恋人にすぎなかつた。だがまたため息がこぼれ、エアリー卿が心配そうに彼女を見た。

「何かお困りごとでも、ミス・アール？」と彼は尋ねた。「こんなに深刻そうあなたをお見受けしたことはなかつたように思います。」

一瞬、彼女は何か言いたげに彼の顔を見た。ああ、もし彼が助けてくれたら、もしこの付きまとう記憶を彼が払拭してくれたら、自分の問題をすべて打ち明けることができ、彼がヒュー・ファナーリーから彼女を救ってさえくれたら！だが全ては適わぬことだつた。あたかも彼女の考えていることに答えようとするかの如く、ギヤスパール・ローレンスが、ある印象的な出来事について話し始めた。彼の友人である一人の紳士が、美しく洗練されたある女性に夢中になつて結婚しようとしたものの突然彼女から離れてしまい、二度と会わなかつた。なぜなら結婚前に彼女が彼に嘘を吐いていて、彼を欺いていたことが分かつたからだつた、という話だつた。ギヤスパールはこの話を、彼女には厳しすぎる対処だと考えているようだつた。だがエアリー卿とライオネルの考えは違つた。

「確かに」とエアリー卿は言つた。「私にとつても嘘ほど許しがた

いものはありません。卑しく、見下げ果てた、そして私にとつて不快なそうした人は、ただ一言「嘘つき」で片づけられます。突然怒り出したり、感情を制御できなかつたり、酷い恨みを残したりすることなど——は、許しうることです。男性でも女性でも私に嘘を吐いたことが分かつた場合は、二度と顔も見たくありません。」

「私も同じですね。」と、ライオネルは言つた。「おそらく私はもっと厳しいでしょう。嘘を吐いたことを謝ろうとするそぶりさえ許しません。私が好きなのはいつも率直で正直で誠実な人々です。」

「そんなに重たい真実は、ボートを沈めてしまひますわ。」とベアトリスは気軽そうに言つた。だがエアリー卿の言葉は、彼女の胸にまつすぐ届いた。もし彼に知られたら。でもそんなことは決してない。そして再び彼女は、父が問いかけてくれたあの時、すべてを打ち明けてしまつてさえいれば、と思うのだつた。

後にリリアンはダッカー氏の言葉を思い出し、彼らが意味のない無駄話をしていたわけではなかつたことに思い当たつた。

ベアトリスは手袋を外し、聞いたばかりの物語——ウンディーネと水の精霊の物語——を思い起こしながら冷たく深い水に手を差し入れ、ボートのへりに寄つて深みを覗き込んだ。そこには青い空とふわふわした雲、緑の高木樹とその豊かに生い茂つた葉が映つていた。穏やかな湖面には奇妙で不可思議な魅力があつた——この湖面の下には何があるのだろうか？この静かな小波の下には？突然、彼女

は静かな夏の空気を切り裂くような驚きの叫び声をあげ、身を引いたが、その叫びは生涯エアリー卿の耳から離れなかった。彼女の顔を見ると、唇までもが真っ白になっており、その瞳には名状しがたいすさまじい恐怖が浮かんでいた。

「どうされました？」と彼は息せき切って尋ねた。彼女は必死の努力で平静を取り戻し、笑みを浮かべようとしていた。

「私はなんて愚かなのでしよう！」と彼女は言った。「おまけに、あなたがたに笑われてしまいますわ。ただの幻想で何の意味もないことと分かっておりますの。ですが水の中を覗き込んだ時、気味の悪い嘲りの笑いを浮かべた私自身の顔が見えて、驚いたのです。」

「ただの反射でしょう。」とライオネル・ダッカーは言った。「私も自分の顔が映っているが見えます。もういちどご覧になっては如何ですか、ミス・アール。」

「いいえ。」と彼女は身震いしながら答えた。「馬鹿げたことだと分かってはいるのですが、仰天しました。その顔は深淵から現れて笑ったのです——ああ、ああ、あの笑いかた！いつか忘れられるのかしら。」

「湖面が波立って、反射を歪めたのでしよう。」とエアリー卿が言った。

ベアトリスは答えることなく、寒気を感じたかのようにレースのシヨールを巻き付けた。

「水が嫌いなのです。」とやがて彼女は言った。「いつも怖い思いをさせられます。ミスター・ローレンス、どうか岸に着けてください。二度と湖には参りません。」

ギヤスパーは笑い、ダッカー氏は、ベアトリスがあまりにもウンディーネと水の精霊の話に強い印象を受けたからだろうと断言した。エアリー卿は、ボートから降りる彼女を助けた際に、その手が震えているのに気づいた。彼は、彼女がこの出来事を忘れられるようにと、例の舞踏会とそれがとても楽しみだということを話題とした。彼女は快活に話をしてしたが、彼は時おり彼女が非常な寒さを感じたかのように身震いするのを見た。

館に戻ると彼女は皆を見まわし、彼女らしい魅力的な堂々とした様子でこう言った。

「私が怯えたことは、どなたもお父様に仰らないでくださいね。アール家の一員が非現実的だとか臆病者だとか父に思われてしまうのは嫌なのです。地面に降り立てば、私は充分勇敢ですから。」

外は女性たちには暑すぎたため、レディー・ヘレナは二人の娘たちに、夕食前に休むようにと言った。彼女は自分の身支度用の部屋にある小さな寝心地のよいソファアにベアトリスを休ませた。彼女

は孫娘が黒い瞳を閉じるのを見て、寝ているときのこの娘の顔は何と美しいことかと考えていた。

しかしこの娘の眠りは妨げられていた。アール卿夫人は彼女のほうに身をかがめ、彼女が深いため息をついて「深淵」などと呟いているのを聞きとった。そして彼女は自分自身の顔を夢に見て叫んで飛び起き、アール卿夫人はそのこめかみに大粒の汗が浮かんでいるのを目にした。

「まあ、この子は、どんな夢を見ていたのです？」と彼女は尋ねた。「あなたのような若い娘は花のようにぐっすり眠るものですよ。」

「花は目を開きませんわ。」とベアトリスは微笑みながら言った。「私は目を閉じたのですが、眠っていた間でも脳は活動していたよ。うなのです。私はあの湖の夢をみておりました、おばあ様。夢とはとても不思議なものです。正夢なんてあるのでしょうか？」

「じつさいにあつた話を一つ知っていますよ。」とアール卿夫人は答えた。「若いころ、私にはとても大切な友人がいました——彼女はローラ・リアドンと言いました。レミュー大尉というある紳士が、彼女に関心を示していました。彼女は彼を愛しており——可哀想なローラ——それはめつたにないほどの深い愛情でした。幾月もの間、彼はプロポーズ以外の全てのことを彼女にし尽くしました——毎日会いに来て、花や本や楽譜を贈り、あらゆる甘い言葉と優しい振る

舞いで彼女の心をつかんだのです。彼女は彼が本気だと信じており、恋をもてあそぶような男性とは思ってもよらなかったです。しかし彼は突然、ごく普通の別れの挨拶をすると数週後に戻ると言い残し、ロンドンを去っていきました。」

「ある朝、彼女は私のもとに来て、奇妙な夢の話をしました。その夢の中で、彼女は死んで古い田舎の教会の中央通路の下に埋められ横たわっていたというのです。同時に、夢にはありがちなぼんやりした話ですが、彼女は常にない賑わいに気づいていたと言います。馬車が教会の扉に近づく音が聞こえてきました。ドレスの衣擦れの音と足音、人々のどよめきも彼女の頭上から聞こえました。そして彼女は結婚式が挙行されていることに気づきました。司祭が尋ねていました。」

『ジョージ・ヴィクター・レミュー、汝はこの女を娶り、妻とすることを誓いますか？』

彼女が知っている、誰よりも愛した人の声が答えていました。

『はい、誓います。』

『アリス・フェラーズ、汝はこの男に嫁ぎ、夫とすることを誓いますか？』

『はい、誓います。』と、澄んだ落ち着いた声が答えました。」

「彼女は、結婚式が終わってウエディングベルが鳴り響き、馬車が遠くへ走り去るのを聞きました。私は笑いましたよ、ベアトリス。ただ不思議なことに、ジョージ・レミュー大尉は、ローラがちょうどこの夢を見た日に結婚していたのです。彼が結婚したのは若い女性でアリス・フェラーズという人でしたが、ローラはその夢を見る前には一度もその名を聞いたことはなかったのです。結婚式は古い田舎の教会で執り行われていました。正夢だったのです、ベアトリス。こんな夢の話は他に聞いたことはありませんでした。」

「お友達はお亡くなりましたのですか？」と彼女は尋ねた。

「いいえ。」とレディー・ヘレナは答えた。「亡くなりはしませんでした。でも彼女の人生はこの不幸な愛によって損なわれてしまったのです。」

「そんな絶望を味わうくらいならば、私は死んだ方がましです。」とベアトリスは言った。「愛する人を失うのは、死ぬより辛いことですから。」

このあたり一帯では、アールズコート of 舞踏会の話でもちきりとなっていた。長い間、この界限で、それほど盛大な舞踏会が開かれたことがなかった。

アール卿は、幾重にも重なって咲き誇っている溢れんばかりの豪華な花々で飾られた舞踏会の大広間を見渡し、誇らしく思った。それははるばる遠方からでも訪れて、一目見るに値する光景だった。花々の合間の此処彼処に、大理石の像が立てられ、小さな泉には香り高い水がリズムミカルな小波を立てていた。彼は花々を眺めながら少し歩を休め、彼の美しい娘に思いを馳せた。

「あの子は、明るく楽しいことをどれほど愛していることか！」と彼はひとり言を言った。「あの子は今夜のこの舞踏会の女王になるだろう。」

この夕べ、アール卿が書齋で一人読書をしており、半時間も経った頃、優しいノックの音がした。

「どうぞ」と彼が言うと、我が目を疑うような姿が目前に現れた。

「おばあ様が、私がどうしたらよいかここに来て何うようにと仰ったのです。」とベアトリスがはにかみながら言った。「お父様が、私のダイヤモンドの場所と、私がそれを身につける許可を下さるから、と仰って。」

この輝くような姿を見ているうちに、彼は不思議な感覚にとらわれた。このすばらしい美女が本当にドラの娘なのだろうか——ずっと昔、可愛い手をイチゴの果汁まみれにしていた、あのドラの？

彼には衣装の細かいことは何もわからなかったが、ただ美しい顔立ちと、輝く瞳、波打つ髪の毛、白く誇り高い首や上品な腕は目に入った。そして、天使の織物のような繊細で美しいレースに縁どられたピンク色のサテンの生地と、黒い瞳に比べれば輝きの薄れてしまふようなアール家のダイヤモンドも目についた。それらは身に着けているベアトリスを引き立てていた。色白で金髪の美人ならば美しさが損なわれたかもしれないが、ベアトリスの場合にはいつそう引き立つのだった。

「リリアンはどこに？」と彼が尋ねた。そしてその声の調子から、彼がどんなに誇らしく満足に思っているかが彼女に伝わった。

「私はここです、お父様。」と優しい声が答えた。「最初にベアトリスをご覧いただきましたかったの。」

どちらの娘がより賞賛に値するのか、アール卿にはわからなかった。リリアンはあまりにも綺麗で優美だった。汚れない、気高い顔立ちと優しい瞳には清新な美しさが宿っていた。ほっそりした娘らしい姿は、威風堂々としたベアトリスと好一对であった。

「二人とも今夜は楽しんでおいで。」と彼は言った。

「私には間違いなくそうなりますわ。」とベアトリスは微笑みながら言った。「私はいつも楽しんでますし、この舞踏会も楽しみにし

ておりましたもの。」

アール卿は半ば悲しそうに微笑んで明るい顔を眺めながら、いつかこの顔が曇ったり陰ったりする日が来るのだろうかと思っていた。

「お父様は踊られませんか？」と、ベアトリスはその黒い瞳をいわずらっぽく輝かせながら尋ねた。

「踊らないよ。」と彼は答えた。そしてロナルド・アールの想いは最後に踊った時に戻った――それはヴァランタイン・カーテリスと踊った時だった。彼はそれをよく覚えていた。ああ、いや！彼にとつて、そうした楽しく幸せな日々は全て過ぎ去ったのだった。

(以下、次号)